

## 【プロローグ】

のどが乾く。

水、下さい。

誰が水をくれた？

空腹。

お前の空腹？

私の空腹？

食べ物がある。

野望がある。

人がいる。

空腹がある。

空腹の人がいる。

空腹。

そこに、人がいる。

【シーン 1 女1 モノローグ】

女1 私は月に住んでいる。

月世界の人々は銀河の水だけを飲んで、生きている。

食えることは、罪……。

食えることは、月世界を汚す、罪。

けれど私は、銀河を泳ぐ魚を食べた。

魚は、私に言った。

「私は、間もなく死んで行きます。もし、あなたが私を食べてくれるなら、私は、あなたの一部分になり、あなたの体の中で生きることができます。私を食べてください。」

私は、その魚を食べた。

私が食べた魚……、銀河を泳ぐ魚……。

そして私は月から追放される。

地上への墜落。それが罰……私への……。

私は知らない。そこがどんな処か。

私が行かなければならない、そこ……。

私は記憶の川のほとりで歌う。

さようなら、私の故郷、月よ……。

さようなら、私の故郷、月よ……。

さようなら、みんな……。

さようなら、みんな……。

【シーン 2 掃除機 女3モノローグ】

女3

待つことは 沈黙

待つことは 夢

待つことは 痛み

沈黙の町の停車場

私は待っている

待合室の寂しいベンチ

古い時計が刻を刻んでいる

沈黙の世界の中で

待つことへの要求

沈黙の世界の中

旅立つことへの要求

待つことは 恐怖

待つことは 謎

待つことは 沈黙

私、何を待っているのかしら？

目に見えない埃を、掃除機で吸い取って毎日……

私……掃除機に吸い込まれる日を待っているのかも知れない。

私、待つためにだけ生きている。

私、待つことを憎んでいる。

私、待つことなしには生きられない。  
多分、それが私。

私、時々、待つことが、辛い

私、時々、待つことが、楽しい

古い掃除機・・・。

使っている時には、うるさくてたまらない掃除機・・・。  
でも、掃除機が止まると、

私・・・、

寂しくなる・・・。

古い掃除機・・・。

昔、一緒に買って、

彼が残して行った掃除機・・・。

これ以外の物は全部持っていったのに  
たった一つ残して行った掃除機・・・。

何故、掃除機だけを残して行ったのか、  
わからないわ、私・・・。

私、時々、待つことが、辛い

私、時々、待つことが、楽しい

【シーン 3】

女1 ここは、どこ？ 私は誰？

浮浪者1 匂いがする。

浮浪者2 そう・・・匂いがする。

浮浪者1 同じ匂いがする。

浮浪者2 そう・・・同じ匂いがする。

浮浪者1 魚の匂いがする。

浮浪者2 そう・・・魚の匂いがする。

浮浪者1 銀河の魚の匂いがする。

浮浪者2 そう・・・銀河の魚の匂いがする。

浮浪者1 おまえは、月から来た女だ。

女1 あなたは誰？

浮浪者1 あなたは誰ですか？（わざと丁寧に訊く）

女1 私は・・・

浮浪者2 お前は・・・

女1 私は・・・

浮浪者1 お前は、私らだ。私らは銀河の魚を喰った。

浮浪者2 ここそと内緒に喰った。

浮浪者1 監視の目を盗んで喰った。どこか遠くからひっそりと月に入ってくる噂。

浮浪者2 耳から耳に伝わってきた誘惑の話。

浮浪者1 食べることは愉悦。

浮浪者2 味は恍惚。

浮浪者1 どうだ禁忌を破って秘密を確かめてみたことはないか？

浮浪者2 秘密、秘密  
 浮浪者1 私ら、地上に逃亡した。  
 浮浪者2 食べる楽しみに耽けることのできるここに。そして、  
 浮浪者1 お前は銀河の魚を食べた女。  
 浮浪者2 そして、  
 浮浪者1 月から追放された女。  
 女1 月から・・・  
 浮浪者2 そうだ。  
 女1 地上へ・・・？  
 浮浪者2 そうだ。  
 浮浪者1 汚濁の地上。  
 浮浪者2 喰い物のある地上。  
 浮浪者1 虚栄の地上。  
 浮浪者2 酒のある地上。  
 浮浪者1 野望の地上。  
 浮浪者2 うまい味のある地上。  
 浮浪者1 金銭の地上。  
 浮浪者2 そして、  
 女1 そして・・・？  
 浮浪者2 空腹。  
 女1 空腹・・・？  
 浮浪者1 私ら、腹が減っている。  
 浮浪者2 そして、  
 女1 そして・・・？  
 浮浪者1 お前が来た。  
 浮浪者2 食べたばかりの

浮浪者1 魚の匂いがする、お前が

浮浪者2 来た。

浮浪者1 お前、お前は飯だ。俺たちの飯だ。

浮浪者2 俺たちはお前を喰う。

女1 私を・・・？

浮浪者1 お前を、お前を喰いつくす。

女1 助けて、助けて下さい。

だが浮浪者2は女1を犯し、浮浪者1はバナナを食べ乍ら、それを見ている

浮浪者1 お前は肉だ。

誰の肉だ。

肉はうまい。

お前はうまい肉だ。

【シーン 4】

女1は倒れている、女2が現れる

女1 あなたは誰ですか？

女1 あなたは誰ですか？何をするのでですか？

女2 あなたを助けてあげたいのよ。

女1 (女2の手話を真似る)

女2 あなたは誰？私、あなたの言葉が分からない。

どこから来たの？道がわからないの？とても困っているみたいね。

女1 あたたかい心・・・、あなたは誰？

女2 私は誰？私は旅人、いつでも旅人。

私、辛い過去を持つているの。だから過去を忘れるために旅をしているの。未来を探すために旅をしているの。

【シーン 5】

女2が女1をつれて女3の家に戻ってくる

女1 ただいま。

女3 お帰りなさい。

女3 (女1に) 迷児？家出娘？それとも、どこから逃げ出してきたの？まるで自分自身

の影法師のようね。心配ない。ここは安全地帯の安全番地。

女1 あなたは誰ですか？何故、私を助けてくれるのですか？

女3 私、あなたの言葉がわからない。でも、私、あなたが何を欲しがっているのか、わかるような気がする。

一緒に食べましょう。

女2はリンゴを三つ持ってくる。が、女1は拒絶する

女3 どうしたの？食べないの？食べられないの？

食べ物はあるのに噛み付かない。生きるために食べて。

あなたは命が大事じゃないの？それとも命はいららないと思っているの？

女1は食べない

女2 食べよ。

女1 私は魚を食べた。魚は私に言った。「私は間もなく死んでゆきます。だからあなたに

食べられ、あなたの命がある限り生きてゆきたいのです。」

地上で私の体は食べられた。わからない……。

食べる人……。食べられる人。

女2 あなたが何を言っているのか、私、わからない。

でも、食べることは生きること。生きるとは食べること。

女1 月の魚の希望。それは私に食べられることだった。

女3 食べて、生きて、行く……。それが人よ。それが人間よ。

私は食べる。そして、生き抜く。私は食べる。そして、生き残る。

女1 どうすればいいの？私……。

女3 これは林檎よ、林檎はおいしい食べ物よ。

食べてみて。

女2がいきなり林檎を食べる

女2 おいしいよ。

女3は食べる

女3 おいしいよ。

女1はようやくやく食べる

女1 (日本語で) おいしいよ。

(韓国語で) 私は食べた。楽しく、明るく、嬉しく、大切に、歌を歌うように、詩を詠むように、食べることを愛して食べました。

(日本語で) おいしいよ。

【シーン 6】

浮浪者たちが酒を飲み乍ら、うろついている

浮浪者1

破れた夢の

浮浪者2

裏通り

浮浪者1

俺たちは、うろつく

浮浪者2

そして

浮浪者1

俺たちは探す

浮浪者2

そして

浮浪者1

俺たちは、くんくんと匂いを嗅ぐ

浮浪者2

そして

浮浪者1

俺たちは呑み込む

浮浪者2

そして

浮浪者1

俺たちは消化する

浮浪者2

腐肉を喰う動物・・・獣

浮浪者1

飯を食ったか、と訊く

浮浪者2

奴はいない

浮浪者1

誰一人、いない

浮浪者2

だから

浮浪者1

自分自身で探す

浮浪者2

生贄の肉

浮浪者1

俺たちが恐れているのは

浮浪者2

胃袋の暗闇

浮浪者1

食道の破壊

浮浪者2  
浮浪者1  
浮浪者2  
浮浪者1  
浮浪者2  
浮浪者1  
浮浪者2  
浮浪者1  
浮浪者2  
浮浪者1  
浮浪者2  
浮浪者1  
浮浪者2  
浮浪者1  
浮浪者2  
浮浪者1  
浮浪者2  
浮浪者1  
浮浪者2  
浮浪者1

咀嚼できない歯  
破れた夢の  
裏通り  
俺たちは野良猫より早く  
鼠を  
探す  
そして  
喰う  
人たちは  
俺たちを  
掃除人と呼ぶ  
俺たちが通りすぎた後には  
ゴミのかけら、ひとつ、残らない  
何も残らないから  
何も残らないから  
何も残らないから

【シーン 7】

女達は思い思いに座っている

女3 それがなければ、生きられない。

それは何？

女2 それがなければ、生きられない。

それは何？

女1 それがなければ、生きられない。

それは何？

女3 記憶。

女2 記憶。

女1 記憶。

韓国語と日本語の発音が似ていることに気付いた女2が言う

女2 もう一度。

女1 記憶

女3 記憶

女3 私、あなたの言葉がわからない。

でも、話して。

聴きたいわ。記憶を話して。

あなたの声は風のよう。  
風の余韻のよう。  
記憶・・・。  
あなたの記憶・・・。

女1

夏風 風 ゆらり  
ゆんらり ゆりり 風 夏風  
とろり お日様  
皮膚が ほどけて  
ゆんらり とろり ゆりり  
骨が ほころんで  
ええ 皺が溶ける  
夏の夏 夏風 夏 夏風  
ああ あたたかい風  
うっとり 静かな心 夏  
そう 夏風の清寂  
甘く・・・ 甘い・・・  
風の味が 濃くて 甘くて  
ほんのりと 麦藁の味もして  
日かげにいる時と 同じ味  
そんな味  
夏風は おなかに溜まって  
眠くなる  
こんなふうに風がやさしいと・・・  
私・・・  
昔を思い出して、私・・・

私・・・  
母さんの、膝・・・  
母さんの・・・  
母さん・・・

女3 私、たった一つ、あなたの言葉がわかる。

それは、「母さん」という言葉。

きつと、あなたは、母さんが懐かしいのね。

母さん・・・母さん・・・

私にも母さんがいた。でも父さんはいなかった。

母さんは、朝早く家を出て行き、

夕方まで帰って来なかった。

私たち貧しかった。あっち転々、こっち転々。

母さんは、いつも、言っていた。

流れる川のように歳月も流れていく。

そして言った。

世間の流れに添って生きてゆくのはとても楽だわ・・・。

でも母さんはそうしなかった。

だから、私たちはいつも、あっち転々、こっち転々。

私たち、貧しかった。

母さんと私、いつも一つの寝床で寝た。

一緒に眠った。

そして、真夜中・・・。

鼻が鳴いた。

森の中から鳴いた。

川の向こうで鳴いた。

あっち転々、こっち転々。

どこへ行っても鼻は鳴いた。

梟の声を真似る

女3

母さんは、梟の声が好きなんだと、私、思っていた。でも、それは違っていた。

男が母さんと呼んでいた。

私、それを知った。

それから私、眠れなくなった。

梟が鳴く夜、私、眠れなかった。

そんな夜、母さんは、子守歌を歌ってくれた。

「ねんねこ　しゃつさりませ

寝た子の可愛さ

起きて泣く子の

ねんころろ、面憎さ

ねんころろ・・・　ねんころろ・・・」

起きて泣く児は、憎い子・・・

憎い・・・。

梟が鳴く夜。起きて泣く児は憎い。

だから私、眠った振りをした。

母さんは私の寝顔を静かに見ていた。

梟が鳴く夜。

母さんは出て行った。

梟の声は男の声。

そしてある朝・・・

母さんは帰って来なかった。

家に帰って来なかった。

眠りから醒めて、私、その事を知った。

母さんは帰ってこない。

帰って来ない。

自分の影を踏む人間はいないと、他人は言う。でも、私は自分の影を踏んだ。

そう、私は一人で生きて来た。一人で生きて……いる。

それでも、時々、母さんが懐かしい。

懐かしい……母さん……。

母さん…… どうやって生きてる？

母さん…… どこで生きてる？

梟は、今も、鳴いて……いる？

梟の声を真似る

【シーン 9】

三人の女は座っている。静かに刻が流れる。  
女2が立ち上がり、手話で言う。

女2 私、繭の中に閉じ込められていた。

繭は血の糸・・・赤い糸・・・。

父さんは繭を見張っていた。

私、外に出たかった。

でも、どうやっても出られなかった。

私、父さんに頼んだ。泣いて頼んだ。

「ここから出して・・・父さん

ここから出して・・・父さん」

でも父さんは出してくれなかった。

私、空を見たかった。

空がどんな色をしているのか・・・

私、海を見たかった。

海がどんな色をしているのか・・・

見たかった。  
見たかった。

短い沈黙

女2 　　そして父さんは死んだ・・・。

糸は、ほどかれた。

糸は血の糸、赤い糸・・・。

私、旅に出た・・・。

父さんが死んだ次の日の朝

私は旅に出た。日ざしの中に・・・出た。

ほほえむ女2

女2は女1と女3を見る。

女1と女3は立ち上がる。

女2は女3の体に触れると言う。

女2 触れる・・・。

女3は女1の体に触れると言う。

女1 知る。

三人の女達は互いの体に触れると言う

触れる・・・

感じる・・・

知る・・・

触れる・・・

感じる・・・

知る・・・

触れる・・・

感じる・・・

知る・・・

【シーン 10】

雷の音。

驚く女達。

沈黙。

女1

雷の音・・・。

雨が・・・降って・・・

来た・・・。

聴いて下さい。

華麗な音

空に光が走る。

すてきな音。

また光った。

許し・・・。

罪の刻は終わった。

月が私に戻って来いと言っている。

空・・・。

そこは私の故郷。

私が生まれた処。

空・・・。

雨は、空の涙。

雷の音は、空のほほえみ

空に住む人たち。

聞いて下さい。

私は決めました

私はもう地上の人間。

私はもう食べることを知りました。

だから私は地上で生きてゆきます。

食べて生きてゆきます。

食べることは罪ではありません。

私は生きてゆきます。

月には帰りません。

ここは地上。

この地上……。

この地の涯に何かあるのか、

知りたい……。

私は月には帰りません

知るために行きます

私に食べて生きることを教えてくれた、あなたたち。

感謝を捧げます。

暗転

そして闇の中に女1の声だけが残る。

女1

さよなら……

ありがとう……



【シーン 1】

浮浪者1 馬鹿！ お前が、まごまごしているから、おまわりに見つけられて、追い廻

された！へとへとで死にそうだ！

馬鹿はお前だ。俺は、ちゃんと盗んできた。

何を？

関係ない。

見せろ。

嫌だよ。

げじげじ野郎！ 犬畜生！

何とでも言え。

嘘つき！ 乞食！ 癪病！ 覺！ 間抜け！ 鈍間！

鈍間？ 冗談じゃない。鈍間にこんな物が盗めるかい？

浮浪者2は袋から卵を一つ取り出して浮浪者2に見せつける。

それを見て浮浪者1は叫ぶ。

浮浪者1 卵だ！

浮浪者2 そうだよ。それも生んだばかりの卵だ。雌鶏が生んだばかりの卵だ。

浮浪者1 お前は、やっぱり馬鹿だ。

浮浪者2 何故？

浮浪者1 何故？ 何故、雌鶏を盗んで来ない？

浮浪者2 雌鶏を盗んでくれば、親も子も喰うことが出来たのに。

喰ってしまえば、明日、卵が食べられない。

浮浪者1 明日の卵より、今日の雌鶏だ。

浮浪者2

しかし、仕方ない。卵しかない。渡せ。

これは、俺の物だ。

浮浪者1

お前の物は、あたしのもの。あたしのはあたしものだ。

浮浪者2

嫌だよ！

浮浪者2は卵を奪い合おうとする。

そして浮浪者2の手から卵は落ちて割れる。

浮浪者達は一瞬啞然としてそれを見ている。しかし突然地面の卵を食べる。浅ましく食べる。

【シーン 12】

小さく明るむ光の中

女2と女3が座っている

女2は手話で女3は言葉で話す。

女2 夢を見ていたのかしら？

女3 夢を見ていたのかしら？

女2 何だったのかしら？

女3 何だったのかしら？

女2 わからない。

女3 わからない。

女2 でも……、

女3 でも……、

女2 愉しかったわ。

女3 愉しかったわ。

女2 愉しく過ごしたわ。

女3 愉しく過ごしたわ。

女2 私……、

女3 私……、

女2 拡がったわ。

女3 拡がったわ。

女2 心が、

女3 心が、

女2 拡がったわ。

女3 拡がったわ。

女2 出会い……。

女3 出会い……。

女2 とても幸福な言葉ね。

女3 とても幸福な言葉ね。

女2 あの人……、

女3 あの人……、

女2 誰だったのかしら？

女3 誰だったのかしら？

女2 わからない。

女3 わからない。

女2 誰かだったのよ。

女3 誰かだったのね。

女2 そうよ。

女3 そうね。

突然、女2が立ち上がる。

女2 私……、

女3 何……？

女2 行くわ。

女3 どこへ？

女2 どこかへ……。

女3 そう。あなたは、どこかから来て、どこかに行く。

女2 そう。あなたは、どこかから来てここにいます。

女3 いるわ。ここに。

女2 ここは・・・、

女3 私の家、私たちの家、それから・・・。

女2 それから・・・？

女3 分かち合いの家。

女2 分かち合いの家。

女3 そう

女2 又、来るわ。

女3 待ってるわ。

女2 さよなら。

女3 さよなら。

女2 又、会おうね。

女3 又、会おうね。

女2 ここで。

女3 ここで。

女2 きつと。

女3 きつと。

女2 は明るく笑って出て行く。

女3 は明るく笑って見送る。

【シーン 13】

憔悴した浮浪者たちが、のろのろと歩いている。浮浪者たちは譫言のように言っている。

浮浪者1 地獄横丁・・・空腹

浮浪者2 盲目の街路・・・空腹

浮浪者1 暗闇の通り・・・空腹

浮浪者2 骸骨の窓・・・空腹

浮浪者1 恐怖の影・・・空腹

浮浪者2 冬の黄昏・・・空腹

浮浪者1 屑籠の喚き・・・空腹

浮浪者2 運命の破壊音・・・空腹

浮浪者1 萎んだ陰茎・・・空腹

浮浪者2 夢は悪夢・・・空腹

浮浪者1 肉体は石・・・空腹

浮浪者2 魂の抜けた監獄・・・空腹

食べ物一杯に詰めた籠を両手に持った女1が現れる。

食べ物を見て飛びつく浮浪者たち。

食べる。食べる。食べる。

女1は言う。

女1 わかったのです。

空腹は辛いこと。

飢餓は人の心を殺す。

愛を殺す。

わかったのです。

私が誰かに力を及ぼしているのではなく、誰かが私に作用しているのでもなく、私たちは引力の法則に引かれていることを。

引力・・・。

空腹の人たち。私を食べた人たち。

銀河の魚は、私の中で生きています。

あなたたちの中にも、私は生きています。

空腹を満たした浮浪者たちは眠っている。

【エピソード】

ありのまま

つかのま

たまゆら のま

いま

……でもなく

……でもない

あなたは……誰？

あなたは……誰？

あなたは……誰？

……でもなく

……でもない

私は……誰？

私は……誰？

私は……誰？

おとだま  
こだま  
たましいのま  
たまたま

・・・でもなく  
・・・でもない

あなたは・・・何？  
私は・・・何？

私の中に  
世界が  
風のように  
流れ込んで  
来る。  
そして  
夢が  
涼しく  
なる・・・。





(日韓合同) 岸田理生カンパニー公演

# 愛を巡る寓話―空から来た人

◎岸田理生 国境を越える演劇シリーズ12